

五月吟

昭和十五年三月
春成手録



特別
14
1919
720



1919
105
720

玉月吟



涼くさのかたまうるなや夜は月
久電

みづはらふけくまむし穴かし
久徳

やわらぬ人かけりる花
几重

この境にま〜く雲生寝坊
大江丸

昔男海花のやうなあはしけし

大い丸

唐土にふやあふけりの月七尺上

書巻

貧乏のじれを懐か暑くあはし

破ん鐘のいゝきも暑し夏の日

杖

端長しと夏子を廻す暑きころあ

草村

暑きるやけつるころの愛とこら

猿籠

石も木も眠らひかゝ暑きころあ

去来

あふ冷し鉦の音せぬ一心院

息貫

乳垂るとあぬを残す暑き日

あら

寺涼く遠きつ子の動きころあ

琴丸

朝日や飯危の向から藤子あけ
杉凡

外かほは手七つけとぬあまも

内らと割る栗のしかりふ

飾も後ろは己せぬ兜こふ
子風

すべーさを何文にまけと
み親 師

大佛に勝のふき涼一さふ
口上

そさうと思ひ出す人皆遠し
口上

旅人の名をりけと行く法も
口上 尤

鎧人裏に九代栄中接子
口上 縁

長き夜や孔のたす三國
口上 志

行秋や杉森とて赤き花の上

鐘の音の輪をうして来り庭をの上

山魁に木魁を松の月の上

まとは淋しとれぬ淋し浮のの上

そぞろもせいひ秋まつことかの上

あまきまつと思ふ心か秋かの上

六門を出んば日本を茶摘の上

いさや寝ん元日ハ又あまの上

思ひとおもへと物をおもの上

いさや寝ん元日ハ又あまの上

世の中の家をよき山にたのみん

吾の愛をよき山にたのみん

有田

わさささむ大坂のあそび名はあみ

やいささき山にたのみん

ササ尾

ことのおおは人の心のあそびば

おせひをのあそび外きうらさ

に上

世をよき山にたのみん

ササ尾

いつく行らむ

形垣

琴を焼いてお酒を煮る

酒淋し其角

利来をサアとよふまき酒に上

今北角天地と格とる皮

に上

まの雨夏夕まの秋のり

世の中よおれ我ど念せむ
白雲

こくせに道おをえんは智だも

はむことのみい思ひさうしん道

行秋を尾花がさうはく死

一茶

河る秋のちこりりれはち瀬舟

あけつくとさとの暮のふがさ

行家朝臣

舟よ心はたぐいキらうの暮のうら

生村富政

我だも狭くと思ふ葉の尾に

まのほさし入る岩の白く

林室四の

若葉ももてテのむらるる山の寺

子規

——くくや思木つふ家の窓のり

凡北

代々つる今終す寺の——くれ丸

甘茶村

ひとつ——漁舟消て——くぬ丸

鳴雪

秣焚く家にあち時る

枕西

松う其に葛の葉染まると時而丸

桂山

大佛をばひかぬと——くれ丸

松宇

あふ池や——くく——者のよもすか

石鏡

黄菊白菊能くんらふの——即向丸

葵太

あふがち江木やう言はす柳の丸

太徳

梅よりと栴に親き小家のふ

廿七

天地のふにもろくもりの月

廿八

故一つ勝もんもこの月の

廿九

月毎にんも月毎にんも

今宵の月似つ月

三十

天曆御巻

秋来ぬと目いすや三のふ

大凡

馬若づらん白きね及んめけこの秋

八量

折合す刀のふに迷ひるく身を

三葉とこと生る道あれ

山川の瀬々に流る、朽土売也

身を捨てるこそ海も瀬也

老の力や東山子の前も恥か
一茶

山里は計の中まもぬ月を

七たふらや書は舞とあはく

田植吟

度々畦のうけさふ一茶よぬ

涼まんやせしむは下にくかふ
一茶

何事もまほき深なる言也

酒と妻、を妻の花見、
其角

利のやつい位のちつこ多きや

わぬはわつ力のちつこ
やけり

人に世にふかきぬわが胸も

志は〜~~~~山あり
西り

我のやけちやどすも
一糸

下ハ衆ハ存也陰氣冠の陰
一糸

而隆々やおまかり楳のち
ち

珠のふつ植かゝりさよ年終
茶

村而も露のほせ玉つこ
茶

江より住や錢出にふせやれら
一糸

合點一と拵るも実いと貧しいと
一茶坊の過きやうよや茶屋
舟とつりくや茶ふもちりき二所
梅屋くやあんを舟も貫い餅
天かきも降つるやうに梅丸

こちとくの花か咲かふが咲かぬか
乱道んで南無河橋院併哉
そつ月のとちんぶしかんのうまき世哉
おとらくや花をおもも口まける
竹橋て八月と佛とおくか茶麦
以上二茶

放れ鷲考一すねて眠りけり
一巻

風はまぎし月は女やせしむる

おとろひのさきと老のさきに

いさうなくわんまはせんぬむの

今宵の月にけしむるや

ふしとよき音に響く秋の物語

わう懐きは武花堂の系

以上古寛

くろくらの雪の汗の光か

海の子の魚の文を裸のうか

煮海や島も見えませんし

飯作のまきやお家の山扉の

苔まきやお家の村に這り上り

田のふの草の御音まきのよき日木

うそいそ静かきふかきつはれ

茶の花や茶葉の傳令の誰

萩松を山の首し南福寺

栗山子さく都道くの姿あつる

豊年の田の面のお栗山子沈みけり

山田守のお栗山子も兵衛の早人死

御志田に法の姿あのかきしふ

た一人いつと稲を刈る人

寒燈に穂も細い思ひ

所とせに表く寺や津地の鐘

夕露の静る包去稲の村

菜を入れし竹瓜あきと拵るまの

以上三首子

夜寺や十歩の庭にそはる花

梅包

やんてえよ棒くくハセむ草まの花

宗因

たまえや名もろき心の朝露

菫道

八文かあみえちけり

鏡

一茶

凍るるよ蓮のつぼみ母に手あみ

けふの光のあめふらねとさかしの

音をにやわぬ底念の里

為守

夜をふらひくきぬれをわづ夢の

たえまのうらとあふたふらふ

うら

鳥まろく竹にこぼるる音もこふ

樽心

わづ影の向土にちたやきりくす

廿卷大

おかけを寝よさや裸のきりくす

丈夫

は髪ぬく枕のふのきりくす

廿卷大

十はらうやあふたやあふたのこころ

廿卷大

やは肌のあつき血汐に觸れんを

淋こぼかきまやをを説く人

御朱衣

起き出て思ひ事ことのあはれに

おきまひにこころかたけ

声しけき井のたぬまらん人けり

なごころのしるしと勸まをいひ

目らなまをけりまをいひはは

人とのまをいひ

いかにまをいひ

いづれか人か

あつたまはあつたま

あつたまはあつたま

あつたまはあつたま

あつたまはあつたま

成尋法師

あつたまはあつたま

あつたまはあつたま

あつたまはあつたま

あつたまはあつたま

あつたまはあつたま

あつたまはあつたま

世の常の事とせしむにおもはる

はーめて物を思ふ身ちんば

まろふやあもかふらま五十

流うも日本の我をえーあか

淋くまふな流葉か下の先祖を

稲妻の打つかるきも家か丸

さあ来いと大口のけけくろ丸

雑鳴くや浪ハ物を一呑ん

かしまーや江戸えれたるのゆか

雲を吐く口つきーなる雲

名月やとそいふにききしはちりこい (廿)

姨捨をいひ老屋もちりこい

ふき合の山とすまはすか

ふきの山

ふきの山とすまはすか

目出度及せしこと一の故も

ふきの山

急いせつと活ねるか秋の暮

以上二条

梅の枝にこねんこねん

げしあふぬおの花にこねん

あう袖に香をたぐひ残りて梅の花

あかて散るぬるわまのかたみん

誓はいたぐみわびを梅の花

こころのみ散るるひる梅は

年ふえはたひ荒んるけ梅の花

ほまふ昔一の香は匂へとも

古寺のくち木の梅もはらひある

そ不ちそ花もまほころびにけり

梅の花いろはそんりそこぬまむ

風にみちぬそ雪のあうりく

以上金槐集

梅散るや銀虫こほる、梅のう

善村

鳥の音に哭かうもせよ散の梅

一茶

陽の残るや梅の花

廿七

梅の花送けつゝ家に花のは

ともくもあらず夢の影

柿本人麿

大蛇の母す人ふいせよ

衣ハきても狐さうり

大伴

身を捨て世を救ふ人もあらず

草の尾にいませとあは

らき

若の夢心は角はさうり

大友

思ふ事し終り有り得ぬ牡丹花

飛月

ぬはたまう妹か玉髪を宿る

わん典き床の塵けを寝る

ぬは玉の思髪しきと去きを

手枕のさへ味待つとるか

朝霞髪わぬ梳く愛し

君か手枕踊うとるを

以上萬葉

心しとるねのことある秋の空の

かえ生んましくをのいろく

紅粉

駿河錦や花はらがるも茶のしほ

甚やほ

可也いも信女いよは夏夜と

身いも信女の信女いよは夏夜と

音もせぞ女ささるとあつた

つく鳥ぶつと長えうし

踏あはきいふまをい行くんた

いふいふのいふいふいふ

海浜街の

夕涼よも男い生れ

女甲

星の名もい人や門涼

あ観

寝くいやいあいあい

いふいふ

お庭をえて来に顔のい

文谷

あふみのまや葉山子の
身の終り

同上

十年の狂態今に葉山子に
冬川や家鴨四五羽に逢ふ
り秋や二十一年の佛に
秋来ぬと柱の拂子動きけり

あけり山清えんを塔一つ

夕まに打たる醒の歌ふ

以上子記

月を飲す長堤十里人稀に
四尺子の空を笑ふ柳花
舟をやくと伸ひし柳花

初シや腰の音あゝを(下)船

よく利いた山葵に話ときん
けり

秀才の物さすぬる午睡也

夏の空入るに似て夜又の心

山洲野も香の異人哉

以上お夜

生ん出て乳房一葉あや稚子の

甘き物思ふ初めうら
有い

異人鳥の天子とさうは涼しから

いれづらに菊さきらんあまは

董ふいふふさき人には生んがし

まじしきや裏は鉦うら光琳寺
以天子よにさる野の長閑さ
寒山の拾得か蜂に驚れしは
朝寒み夜寒をいとう行く旅を
月を行く漱石もあを忘んたう

風を乗つて睡くの行く燕北
以上漱石

門の杉葉に酒を尋ぬれば
番捨て麦茹にや 桜を
つらき店に宿ころひて 白
引音の庭にさびしき酒

山下尋
本朝文略

聖七まはらに庵の住こ 夢
さくしとあしにいたる 折
つあけは 落葉つちと 雪の
時白を焚て 名を考へる

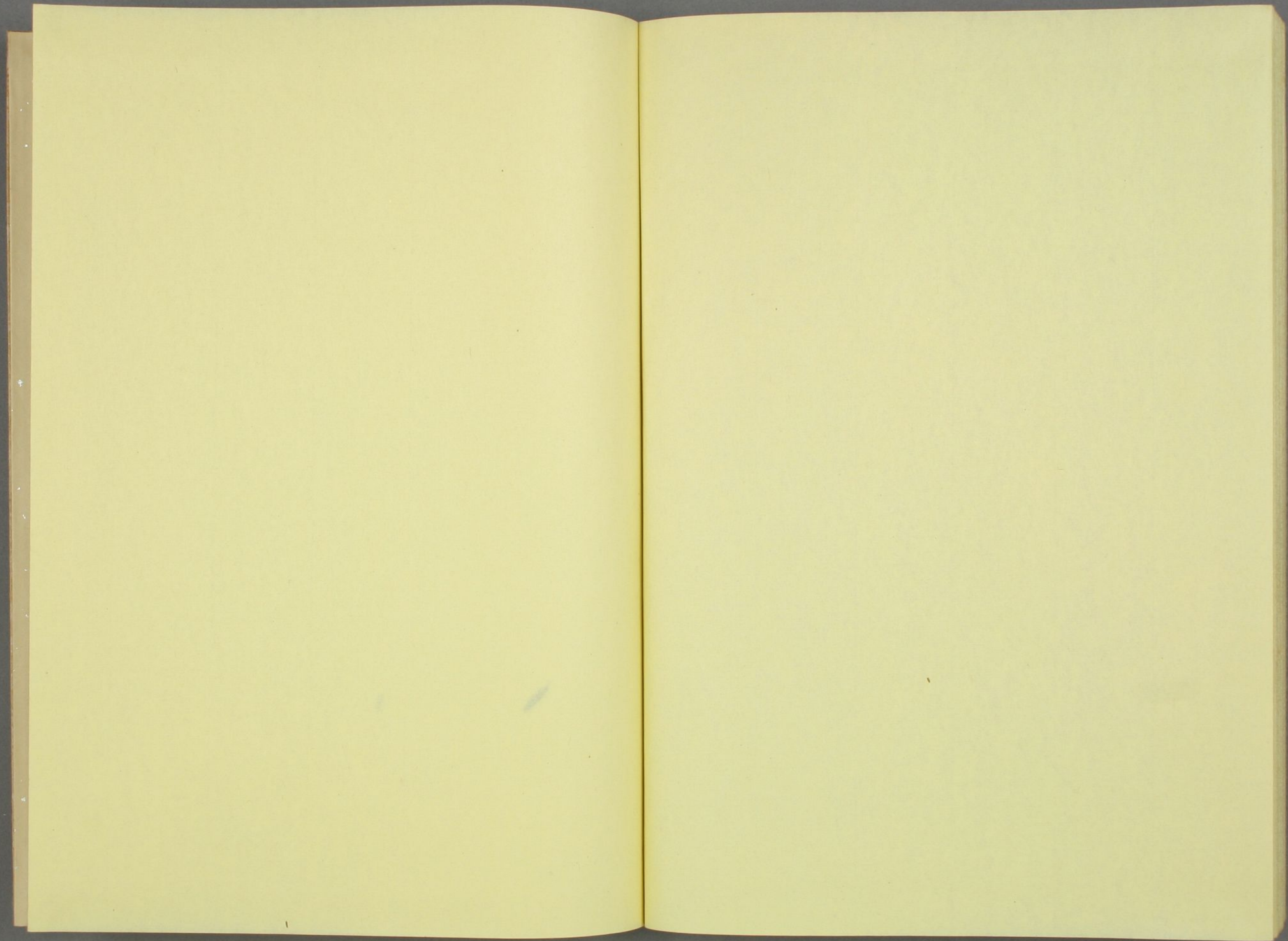
閑居の巻
續後訓詁集

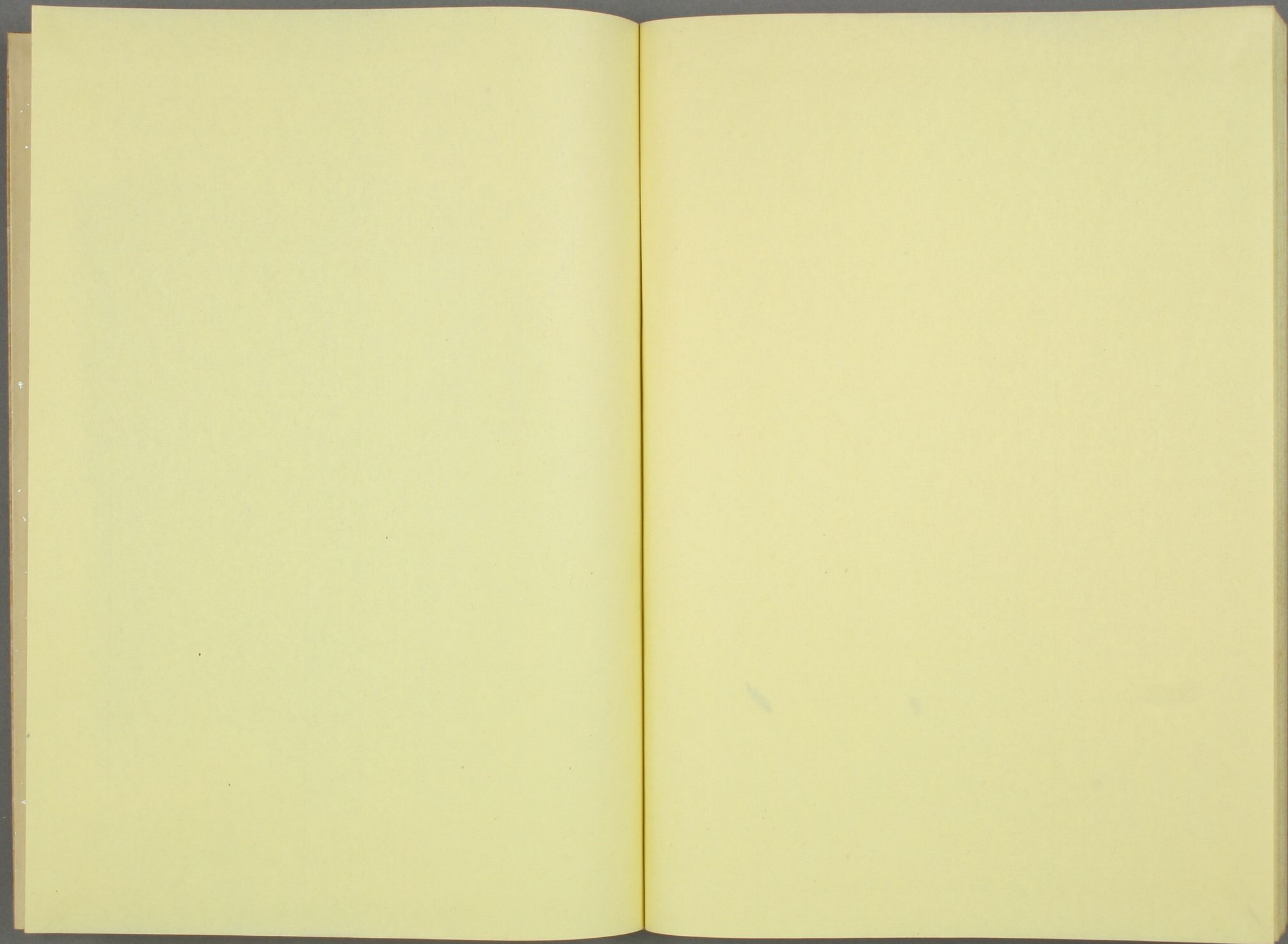
木の葉散つ〜とみ〜とつ
路次に物申の聲うめつ〜
けふをたま〜あひ〜く〜いろの
窓は曇らん白く口切のちみ

炉子 續後訓
詠集

はたおろ〜我床のたけ 鳴
音と菊の夜こぞ宿らんぬ 寐
えぬ傳の燈點了そるんば萩
七す〜き〜と 露の亂九々

促織 本朝文鑑





宗はし京
立價

